富田村　文左衛門　〃　梅吉　〃　藤左衛門　〃　源右衛門　〃　台蔵　〃　民吉　〃　喜左衛門　〃　藤左衛門　〃　田中民右衛門　〃　山時文吉　〃　松田歓左衛門　〃　末次久左衛門　〃　原　利兵衛　富田村　源五郎　新町　萩製ゲーベル一、太鼓一　船来ゲーベル一　以上一二月一二日

船来ゲーベル一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一　〃　一

※原利兵衛のみ西衛団六番小隊団兵用として、
※源五郎は献納人名に見えず、賞美にあり、源右衛門と同一人物か
※金蔵は献納人名にあり、賞美になし

その後、西衛団の団兵には肩印も許され、出張中には下等の者にも帯刀が許された。西衛団の主任務は川崎関門の警備であったが、戦時には動員体制もとられた。明治元年三月末、徳山藩の山崎隊が八〇人増員されたため西衛団は解兵され、その一部が山崎隊へ吸収されていった。富田、福川近村の西衛団兵には福川の真福寺で酒がふるまわれて、その労がねぎらわれた。なお、富田の心光寺は西衛団の陣所として一時使用されたことがある。

山崎隊の創設　山崎隊は慶応元年（一八六五）四月十四日、富田村庄屋・政所の岩崎庄左衛門を賄方とし、「富田隊」という仮称で創設された。翌十五日に隊名を山崎隊とし、小銃五〇挺、刀五〇腰が徳山藩から貸し渡された。仮称の富田隊は創設地の地名を、山崎隊の名称は富田に鎮座する山崎八幡宮にちなんだものである。陣営は富田新町の浄真寺があてられた。同年五月朔日の山崎隊は総人数五七人であり、その内訳は総管二人、軍監一人、器械方二人、応接方二人、稽古取立方三人、兵士三八人、別当一人、小使二人、荒仕子（あらしこ）二人と、藤井幸太

郎、福田常右衛門、原田善右衛門、石田順作らであった。藤井幸太郎ら四名はいずれも富田、福川の者で、山崎隊の世話係と考えてさしつかえない。

山崎隊はおよそ五〇人で発足したが、同年九月には一〇〇人につき総管一人、軍監一人、書記二人、斥候二人、隊長二人、押伍二人の割で役付を置くことが定められ、入隊者は「士気芸術精選の上」で決められた。山崎隊の人数は、慶応四年三月に八〇人を増員して二三〇人になっているので、それ以前は一五〇人前後が定員であったと思われる。

山崎隊の特徴は、士庶を問わない有志の者で結成されたことである。諸士は当主・嫡子で根役を持つ者は入隊できなかった。農町民は農業・商業が取り続けられるように、跡を立てたうえで入隊が許された。新南陽市域からの山崎隊への入隊者は次のとおりであるが、二、三男が多いことがわかる。百姓軒、町家が潰れないように、本人、嫡子の入隊が制限されたためである。このように山崎隊は徳山藩唯一の有志隊として発足したが、その性格は藩の正規軍とされた。山崎隊の戦歴は、慶応二年の四境戦争に一中隊が芸州口の亀尾川に出陣し、翌三年には四境戦争で占領した小倉城を半年間警備した。ついで明治元年正月の鳥羽伏見の戦いをはじめとして明治二年の箱館戦争、明治三年の脱隊兵鎮圧まで徳山藩の主力として戦った。

島原直太郎　福川町佐伯屋菊蔵伜熊槌
河内　勇　富田政所善宗寺伴僧速澄
田中秋之丞　福川田中好左衛門二男仲蔵
石田範蔵　富田川崎石田順作甥
岩崎喜七　富田古市岩崎屋藤蔵伜
田中彦太郎　富田川崎富五郎伜広五郎
村井亀太郎　富田古市村井屋吉助伜亀次郎
片山賢三郎　福川中市亀屋鶴二郎弟光二郎
小池七郎　福川中屋与兵衛二男藤吉
江見二郎吉　福川町野上屋小三郎伜仁介